

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	リ ケン LI Juan		授与番号 甲 1619 号
学位の種類	博士( 文学 )	授与年月日	2022 年 9 月 25 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]		
博士論文の題名	村上春樹・一九八〇年代の短篇作品研究 —『中国行きのスロウ・ボート』、『螢・納屋を焼く・その他の短編』、『パン屋再襲撃』をめぐって—		
審査委員	(主査) 瀧本 和成 (立命館大学文学部教授)	野村 幸一郎 (京都橘大学教授)	
	田口 道昭 (立命館大学文学部教授)		
論文内容の要旨	本論文は、序と結および全 3 部全 9 章で構成されている。各章は以下の通りである。		
	序章		
	第一部 『中国行きのスロウ・ボート』論		
	第一章 外国から日本への眼差し		
	第二章 「貧乏な叔母さんの話」—メタファーとしての束縛—		
	第三章 「カンガルー通信」、「土の中の彼女の小さな犬」		
	第四章 「午後の最後の芝生」		
	第二部 『螢・納屋を焼く・その他の短編』論		
	第五章 「螢」、「納屋を焼く」		
	第六章 「めくらやなぎと眠る女」		
第七章 「踊る小人」—その意味と秩序—			
第八章 「三つのドイツ幻想」—〈非日常〉に投影された冷戦下のドイツ像—			
第三部 「パン屋再襲撃」論			
第九章 「パン屋再襲撃」			
結章			
本論文は、村上春樹が 1980 年から 1985 年にかけて執筆・発表した短篇小説 13 編を研究したものである。			
第 1 章では、異国から日本への眼差しという視点から「中国行きのスロウ・ボート」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」、「シドニーのグリーン・ストリート」を取り上げて考察している。中国、ニューヨーク、シドニーのように外国人の価値観との対峙・共鳴、外国の歌からの刺激、外国文化からの啓示、外国情勢からの「震撼」によって書かれた短篇小説であることをそのモチーフと作品主題との関係性から解明している。加えて、これらの			

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文内容の要旨</p>	<p>作品に共通する遠い視点から日本人の生き方・日本社会を眺め、日本及び日本人を相対化する手法(描写法)を導き出している。</p> <p>第2章では、「貧乏な叔母さんの話」にメタファーとして表現され、機能している「貧乏な叔母さん」という表象の特徴やその意味を考察している。単純な少女から貧乏な叔母さんになる過程で様々な不遇を経て、現在の彼女の存在感が「薄い」ことに対する分析・考察が行われている。</p> <p>第3章では、動物が登場する「カンガルー通信」、「土の中の彼女の小さな犬」を研究対象として考察している。「カンガルー通信」については、「魅惑的」な手紙の特徴と魅力的なカンガルーの役割を追究している。また、「土の中の彼女の小さな犬」に於いては、その「三つ」の「情景」に生きている登場人物達の形象を考察しつつ、作品の主題を明らかにしている。動物を通して、現代人の生き方・存在状況・個人の感情などがより繊細に描かれている佳品であると評価し、その意味についても論及している。</p> <p>第4章では、作品「午後の最後の芝生」について考究している。主人公「僕」の人物形象を精緻に分析し、それを手掛かりとして終局のアルバイトの芝刈りの意味を解析している。回想形式による構成の効果や自己の再発見へと繋がる意味なども作品主題と絡めて論じている。</p> <p>第5章では、作品「螢」、「納屋を焼く」を考察している。「螢」について、「僕」の「やり場のない悲しみ」の内実を明らかにしている。「僕」の悲しみは、「友人の自殺」、「僕」と彼女との心の距離感などと関連し、若くて未熟なためいろいろなことが理解できない現代の青年像を作品から提出している。「納屋を焼く」では、事件の要である「彼女」の消失に主眼を置きながら「彼女」という人物形象の特徴を精緻に分析し、その「消失」に至る過程を究明している。</p> <p>第6章では、小説「めくらやなぎと眠る女」について分析・考察を行っている。「いとこ」の聴覚障害と「蠅の寄生」との関係性を検討しながら、作者の意図に迫っている。とくに「いとこ」の病んだ「耳」の形象に着目し、成長過程での問題と繋げて考察している。</p> <p>第7章は、小品「踊る小人」を論述している。作品中の「異世界」の登場人物である「僕」、「小人」、「女の子」に焦点を当て、物語の内実を解説している。また、この作品執筆のモチーフについても論及し、作者の意図に迫っている。</p> <p>第8章では、「三つのドイツ幻想」を取り上げ、鑑賞と解釈を行っている。作品中描出される「幻想」の内実を明らかにし、冷戦下でのドイツの社会運動などがどのような形で作品に取り込まれて描かれているかなどそのモチーフと主題についても考察している。</p> <p>第9章では、「パン屋再襲撃」を論究している。作中登場人物たちを襲う「空腹感」の正体を探究すべく、時代・社会背景なども視野に入れ、詳細な分析・考察を行っている。</p> <p>結章では、1980年代の村上春樹の短篇小説群の評価と位置づけを行い、その文学的・芸術的価値にも論及している。また、村上春樹の短編(小説)と(外国語作品の)翻訳、随想文(エッセイ)、長編(小説)との関係性についても究明を試みている。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>審査は、主査瀧本和成、副査田口道昭、野村幸一郎の三名で行った。本論文は、村上春樹の短編小説の創作方法と1980年代の短編小説群の特質を解明したところに意義がある。具体的に示すと、本論文の成果は、7点挙げられる。第1は、上記の通り、短編小説の創作方法に着目し、多様な視点から考察していることである。第2は、13作品中5作品に外国(異国)の要素が取り入れられて描かれていることを指摘し、考察した点である。第3は、13作品中5作品に動物と人との関係が描かれていることに注目し、考察した点にある。第4として、回想形式で語る意味や意義を作品の主題と絡めるだけでなく、文学を創作する行為とも繋げて論究している点が挙げられる。第5は、各作品のモチーフに着目し、作者の意図や作品の主題と繋げている点にある。第6は、各作品のモチーフや主題が、他の短編小説とどのように連続性</p>

<p>論文審査の結果の要旨</p>	<p>をもって描かれているかに関して精緻な分析が見られることにある。第7点は、上記にあるように、短編(小説)と長編(小説)との関係性を解明しようとした点にある。作者村上春樹が生きた時代・社会状況や背景、当時の資料を提示しながら作品のモチーフと繋げて、作品を分析・考察したことにより、作者の意図及び作品の主題(多面的かつ緻密な読解)が明確に抽出できており、孰れもこれまでの先行研究に見られない視野の広さと繊細な読み両方を具えた優れた研究と成り得ている。</p> <p>今後の研究課題としては、短編小説だけでなく、他のジャンルの作品や長編小説との関係性をもっと深く緻密に比較検討することが求められる。また、80年代に於ける日本・世界文学の中での村上春樹文学の位置づけと評価、村上作品の文体(表現)のさらなる追究など今後の研究に期待する点も少なくない。しかしながら、それらの課題点は聊かも論全体を損なうものではなく、本論文が創意に満ちた優れた博士論文として高い水準にあることは、審査委員の一致した意見であった。以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p>試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は2022年7月9日(土)15時00分から17時00分まで、衣笠キャンパス末川記念会館2階第1会議室にて行った。学位申請者による論文要旨の説明の後、審査委員は学位申請者に対する口頭試問を行った。審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である日本文学および近代文学での研究史について、学位申請者の文学的事項に関わる知識、主要な研究者とその研究史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会発表などの様々な研究活動の学問的意義についても質疑応答を実施した。それらを通じて学位申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>